I-4

岡田昌春文庫（一）書籍類

友部　和弘・町　泉寿郎
小曽戸　洋・花輪　壽彦

［緒言］

平成十一年八月と同十三年四月の二度に亘り、幕末～明治の漢方医家・岡田昌春（岡田家五代昌春）の未紹介の家伝文書（以下、岡田文庫と称す）が、その玄孫昌春（まさはる）氏から北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部に寄託された。これまでにほぼ資料整理と補修作業を終えたので、ここにその概要と特色を報告する。

［岡田家歴代の略歴］

①初代昌春秀清（～一七五六）御目見医師
②二代昌春秀満（～一七七九）御目見医師
③三代昌春幸英（一七四四～一八一二）田村昌碩とも称す、清水家医師（五人扶持）
④四代昌碩元隆（一八〇二～七〇）号は棕廬、幕府奥医師・法眼（一八六四、二百俵）
⑤五代昌春元矩（一八二七～九七）字は柔克、号は滄海、本姓は丹羽氏、温知社総理
⑥六代玄澄（一八五八～八七）号は復所、本姓は荷見氏、亀田鵠谷門
⑦七代昌孝（一八六九～一九四四）本姓は金井氏、衆議院事務局主事
⑧八代昌徳（一九一一～九〇）
⑨九代昌春（一九四三～）歯科医師

［岡田文庫の概要］

個人コレクションの性格を生かすべく、資料整理にあたっては内容と形態を勘案して以下のように分類した。各部数・冊数も併せて示す。

I①岡田家医籍　二四部四六冊
②岡田家詩文雑著　二一部六七冊
③岡田家系関係　二部七冊
II国書医籍　四一部五一冊
III漢籍医書　六部七冊
IV一般漢籍（含朝鮮）　一四部二六冊
V①国書詩文　一九部三五冊

②国書歴史　一一部一一冊
③国書雑著　一三部二二冊
Ⅵ書簡・墨蹟・一枚物　二七六点
Ⅶ洋装本　六四部六六冊。

［考察］

本報告ではⅥを除いた書籍資料を対象とする。計二一五部三三八冊である。このうちⅦは七代昌孝以降の資料と見られ、医事に渉らないのでこれを除けば、医家岡田家の資料として一五一部二七二冊が確認できる。蔵書目録がないので詳細は不明だが、これが岡田昌春旧蔵書の全容でないことは、例えば大塚敬節収集品中に「岡田氏」蔵印を持つ安政版『医心方』があることや、岡田昌春自筆『薬学一斑抄』に見える架蔵本草書目三五部が一点も伝存しないことからわかる。御子孫の伝聞によれば、水害によって多くの資料が湮滅したとのことである。岡田文庫は昌春旧蔵書の散逸・湮滅の残余ではあるが、それ故にこそまとまった著作以外の個人的な希少資料に富んでいる。

国書・漢籍の別では漢籍二〇部三三冊（一二～三％）、国書一三一部二三九冊（八七～八％）。刊写の別では刊本四三部六九冊（二五～八％）、写本一〇八部二〇三冊（七二～五％）。医書・非医書の別では医書七一部一〇四冊（三八～四七％）、非医書八〇部一六八冊（五三～六二％）等の結果を得る。

［名家自筆・書入本］

岡田昌春自筆本は七五冊。岡田昌春著作の稿本には浅田宗伯・今村了庵・村山拙軒・森立之の書入れがある。岡田昌春・玄澄の詩文稿には浅田宗伯・亀田鵬谷・張滋昉・村山拙軒の手批がある。

多紀家関係では元簡自筆本三冊、元簡書入本二冊、元胤書入本一点、元堅書入本一冊、元堅旧蔵本一冊、元昕自筆本一冊、元佶書入本一冊。山崎宗運自筆本一冊、片倉鶴陵自筆本一冊、渡辺奎輔自筆本五冊など。

森立之関係では立之旧蔵・書入本四冊、約之書入本三冊がある。

本稿は文科省科研費・特定領域A（2）「江戸のモノ作り」研究の一部である。

（北里研究所東洋医学総合研究所）